中エジプト語における文頭辞 *iw* と *ꜥḥꜥ.n* の働き[1]

－「レニングラード・パピルス 1115」を資料とした分析－

永井正勝

1. はじめに

アフロ=アジア語族に属する古代エジプト語は文法体系・時代・文字などの違いに基づいて、古エジプト語、中エジプト語、新エジプト語、民衆エジプト語、コプトエジプト語という5つの発展段階に区分されている（永井 2002:2-4)。この5段階の古代エジプト語の中で、古代エジプト文明の解明に重要な役割を演じているのが中エジプト語[2]である。しかしながらその重要性にもかかわらず、5段階の古代エジプト語の中で文法解明が最も遅れているのが中エジプト語となっている。この中エジプト語の研究で課題となっている点としては、

①個々のテキストに対する記述研究が不足している
②学史の把握が不十分なまま、無意味な論争が繰り返されている[3]

---

[1] *iw* と *ꜥḥꜥ.n* などの表記は古代エジプト語の文字を転写したものである。本稿では Gardiner 1927:27 に掲載されている転写記号を使用する。ただし本稿では接尾代名詞の前に = を補っている。なお、転写記号は音声表記ではないので注意されたい。

[2] 中エジプト語が使用された年代は紀元前 2000～1300 年頃である（Loprieno 1995:5)。

[3] シャンポリオン（Champollion, J-F）によるヒエログリフの解読から今日に至る学史の中で転機となるのが、前世紀中頃から後半に提示されたポロツキーの諸研究である。ところがエジプト学ではポロツキーの研究が正しく理解されずに、ポロツキーが述べていない学説がポロツキーの学説として誤解されている。しかもこのような誤解のままに、ポロツキーへの批判が提示されているのである。詳細については永井 1999; 2000; 2001 を参照

③*iw*, *ḥꜣ.n*, *wn.in*, *m=k* などの文頭辞[4]の働きに関する説明が不十分である
④どのような時制体系が存在したのかが未だ明らかではない
⑤主文と従属節が同一形式となることが多く、従属節の捉え方が難しい

などが挙げられる。

このような問題点を踏まえて筆者は、②の問題を論じた上で（永井 1999）、④⑤に関する論考を発表してきた（永井 2000; 2001; 2002）。また③については、文頭辞 *m=k* の統語論に関する考察を発表した（永井 2003）。このように筆者は中エジプト語の動詞に関わる部分で幾つかの議論を提示してきたが、その一方で、重要性が高いにもかかわらず本格的な議論を保留していた部分もある。その1つが論点③に属する文頭辞の *iw* と *ḥꜣ.n* の働きである[5]。そこで本稿ではこの問題について取り上げる。

以下、第一に先行研究の問題点を踏まえた上で本稿で解決すべき課題を明らかにする。第二に「レニングラード・パピルス 1115」を資料として *iw* と *ḥꜣ.n* の事例を列挙し、第三に *iw* と *ḥꜣ.n* の働きについての考察を行う。なお、本稿の考察は先に指摘した問題点③の一部を解明しようとするものであるが、同時に問題点①の欠点を補うことも意図している。

2. 先行研究の概要

iw と *ḥꜣ.n* を巡る考察の論点は、narrative という用語の扱いに集約される。この narrative を巡って、ガン（Gunn, B.）、ガーディナー（Gardiner, A.）、ポロツキー（Polotsky, H.J.）、ドレ（Doret, É.）、ディペイト（Depuydt, L.）の見解を概観しつつ、本稿が解決すべき課題を抽出することにしたい。

のこと。

[4] これらの語は伝統的には助動詞（auxiliary）・小辞（particle）などと呼ばれるが、*iw* を助動詞と呼ぶ学者（Gardiner 1957:384）もあれば、小辞と呼ぶ学者（Allen 2000:188）もいるというように、用語の使用法は必ずしも一貫していない。そこで本稿では、両者を一括して「文頭辞（Introducing Particle）」と呼ぶことにする。

[5] 以下、*iw* に導かれる文を「*iw* 構文」と、そして *ḥꜣ.n* に導かれる文を「*ḥꜣ.n*」構文と呼ぶことにする。

最初にガンの見解を確認すると、ガンは *iw* 構文を「現在の観点に関わる陳述を導く」(Gunn 1924:98 n.1) として規定していた。つまりガンに従えば、*iw sḏm.n=f* (*iw* 構文の過去形・他動詞) と *iw=f iꜣ.w* (*iw* 構文の過去形・自動詞) は、現在の観点から見た過去形、すなわち「現在完了形」(Doret 1925:247) となる。更にガンは *iw sḏm.n=f* に対して「narrative past ではない」との断りを添えていた。この断りは、ガーディナーが *iw sḏm.n=f* に対して narrative という用語を当てはめていることを考えれば重要な指摘であったと言える。

ガンの著作を吸収した上で中エジプト語の文法書を著したのは、「権威ある大家」に位置付けられるガーディナーである。ガーディナーはガンと同様に *iw sḏm.n=f* を現在完了形として扱っている (Gardiner 1927:§464)。その一方でガーディナーは、ガンが用いていなかった narrative という用語を *iw sḏm.n=f* に適用していた。つまりガーディナーによれば *iw sḏm.n=f* は「narrative tense」(Gardiner 1927:§464) となる。ではガーディナーの言う narrative はどのような意味を持つのであろうか。ガーディナーは narrative を「主文で肯定表現を述べるもの」(Gardiner 1927:§277.3) と規定している。つまり、一般的な肯定文で使用される表現が narrative である。更にガーディナーは、肯定文で使用される不定詞 (Gardiner 1927:§306.2)、分詞・関係形 (Gardiner 1927:§390)、名詞 (Gardiner 1927:§89.2) も narrative としての用法を持つと説明している。ガーディナーによるこのような narrative の用語は定義が曖昧であり、敢えて「narrative」という用語を用いる必要がないように筆者には思われる。かつてポロツキーは「権威ある大家たちが narrative を曖昧な意味で使用しており、そこでは narrative が「述語 (predicative)」「定動詞 (finite)」「直説法 (indicative)」と実質的に同義語となっていた」(Polotsky 1965:17, n.46) と述べていたが、ポロツキーの言う権威ある大家の中にガーディナーが含まれていたのであろう。

では、「権威ある大家たち」を批判するポロツキーは如何なる見解を提示していたのであろうか。ポロツキーはガンの研究 (Gunn 1924) を踏まえた上で、*iw sḏm.n=f* を「自己を中心とした過去形 (egocentric past)」(Polotsky 1965:§49) と定義した。このポロツキーの定義はガンの考える「現在の観点に関わる陳述」と同質であると言える。更にポロツキーは *ꜥḥꜥ.n sḏm.n=f* (*ꜥḥꜥ.n* 構文の過去形・他動詞) を「客観的なナレーション (objective narration)」

(Polotsky 1965:§49) として定義した。客観的なナレーションとは、ナレーターが第三者的な立場で物語を語る際の表現である。このポロツキーの見解によって、従来では曖昧に語られてきた narrative の定義が、ナレーションとして規定されたことになった[6]。

このようにポロツキーの研究によって*iw*と*ḥꜥ.n*の使い分けが明瞭な形で提示されたが、その後ポロツキーのnarrativeを継承するかのように *The Narrative Verbal System of Old and Middle Egyptian* という大作がドレによって発表された (Doret 1986)。この著作のタイトルはnarrativeの学史を考える上で示唆に富むとの印象を我々に与えるものだが、しかしながらドレの著作はnarrativeの考察に大きな貢献をもたらすものではなかったのである。

ドレは *iw* と *ḥꜥ.n* の違いが「stylistic」であること、*ḥꜥ.n* の使用は *iw* よりも極めて少ないこと、*ḥꜥ.n* は明確な始発性マーカーであり、ナレーションのテキスト (narrative text) で新しい出来事を導くときにしばしば使用されること、を指摘した (Doret 1986:126)。だが、このようなドレの見解には判然としない部分がある。それはつまり、*iw* と *ḥꜥ.n* の違いが具体的にどのようなものであるのか、ということである。言い換えればドレの言う「stylistic」なる用語の定義が不明確なのである。ドレの言う「stylistic」とは使用頻度の問題であるのか、それとも始発性の問題であるのか、あるいは単に「文体の」問題であるのか、この点が曖昧である。このような曖昧な説明をしつつも、ドレは「*iw* と *ḥꜥ.n* の違いについては Polotsky 1965, par.49･･･を見よ」(Doret 1986:126, n.1485) と述べている。ところがポロツキーは *iw* と *ḥꜥ.n* の差に「stylistic」なる用語も、「始発性マーカー」という用語も用いてはいないし、そもそも *iw* を narrative とすることに批判的な立場にいたはずである。

このようなドレの見解に対して、既にディペイトが批判的見解を提示している。ディペイトはドレの著作で使用されている narrative を指して、「先に

---

[6] 実はガーディナーも *ḥꜥ.n sḏm.n=f* に対して「narrative tense」という用語を当てはめていた。しかしながらガーディナーは *iw* に対しても「narrative」という用語を当てはめていたのであり、この点において、ガーディナーとポロツキーとでは narrative に対する考え方が異なっている。

言及したドレの著作のタイトルに見られるその用語の使用は、誤った名称である」(Depuydt 1998:25)、学史の把握にミスマッチがあり、「このミスマッチが結果的に矛盾を引き起こしている」(Depuydt 1998:26) と厳しい批判を提示していた[7]。

ドレの見解に否定的な立場にあるディペイトは、ガンやポロツキーの見解を受け入れ、*iw sḏm.n=f* を「話し手に関係した範囲」を示した過去形(Depuydt 1998:22-23)、そして *ꜥḥꜥ.n sḏm.n=f* を「物語モード (narrative mode)」として規定している (Depuydt 1998:21-22)。言い換えれば、同じ過去形でも、語り手の状況から内容を伝えるモードと、語りの状況を超越して出来事を語るモードとに分かれることになる。言うまでもなく後者が物語モードである。

以上、narrative の解釈を中心に学史の概要を確認してきたが、ポロツキーやディペイトは narrative を客観的なナレーションあるいは語りのモードとして捉えていた[8]。ポロツキーやディペイトが用いるこのような narrative の用法は、今日の物語論で用いられるモードとしての「語ること (telling)」(プリンス 1991:109) に近い。それに対して、ガーディナーやドレの用いる narrative は物語論で想起される用語とは異なり、「曖昧な意味 (lose sense)」(Polotsky 1965:17, n.46) で使用されているように思われる。

このような現状において筆者は、ガン、ポロツキー、ディペイトの見解を踏襲して、*iw sḏm.n=f* を「語り手を中心とした過去形 (自己を中心とした過去形)」、*ꜥḥꜥ.n sḏm.n=f* を「客観的なナレーション (語りのモード)」としての過去形として暫定的に規定した上で分析を進めることにしたい。だが分析を行なう前に先行研究の問題点を2つ指摘しておきたい。その1つは、具体的なテキストを用いた実証的な資料提示が不足していたことである。そしてもう1つは「地の文」の「会話文」の区別が行われていなかった点である。以下、これらの問題点を解消させつつ、資料の分析を行うことにする。

---

[7] ドレの研究に対するディペイトの批判の詳細は Depuydt 1998:25-26 及び n. 19 を参照。
[8] また、*iw sḏm.n=f* に対して「narrative ではなく」という断りを提示していたガンも、おそらくはポロツキーやディペイトに近い立場にいるものと思われる。

3. 「レニングラード・パピルス 1115」における *iw* と *ꜥḥꜥ.n*

3.1. 対象資料について

分析対象とする資料は「レニングラード・パピルス 1115」の1点である。

このパピルスには「難破した水夫の物語」と呼ばれる1人称の文学作品が書かれている。現代の学者にとって「難破した水夫の物語」の原典は「レニングラード・パピルス 1115」のみであるが、このパピルスに記されたものは原点からの「写し」である。「レニングラード・パピルス 1115」が模写された時代に関しては、第11王朝とする見解（Simpson 1972:50）や、第12～13王朝とする見解（屋形 1978:425-426）があり、若干の幅がある。とは言うものの、このような見解の幅はテキストの文法が中エジプト語であることを否定するものではない。なお、「レニングラード・パピルス 1115」はヒエラティック書体で書かれているが、分析にあたってはヒエログリフ書体に書き改められた資料（Erman 1906）を使用した。

この資料を分析対象に選定した理由は、①文体が簡潔で、複雑・難解な中エジプト語ではない、②物語のほぼ全体が残存しており、虫食いなどの欠損が少ない、③会話文と地の文が適度に入っており、本稿の分析に適している、の3点にある。だがこの物語は「二重の入子構造」という特殊性を持つ。次のこの点について整理しておきたい。

我々の眼目に存在している物語は作者が読者に向けて書いたものであり、それは図1の一番外側の枠である。我々読者（あるいは古代エジプト人の読者）が眼にする物語の中には上司と部下の会話があり、その会話の中で部下は自らの失敗譚を上司に話す。その失敗譚が図1の入子1である。また部下の失敗譚の中には部下と大蛇の会話が書かれており、その会話の中で大蛇が自らの失敗譚を部下に話すというように、もう1つ別の物語が入り込んでいる。その物語が図1の入子2である。入子構造を持つ物語においては、会話文の中に新たな「地の文と会話文」が派生することになる。従って本稿で地の文という用語を用いる場合、入れ子の中の地の文を含むことになる。

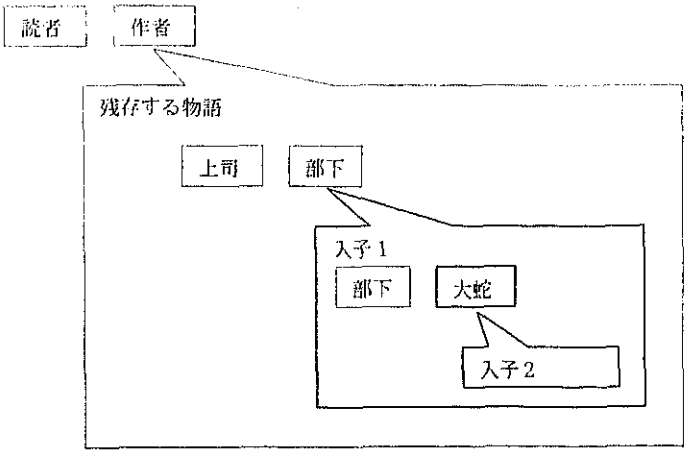

図1：「難破した水夫の物語」の枠構造

最後に、分析資料が1点のみであることの理由を述べておきたい。「はじめに」で述べたように中エジプト語の文法は様々点において未だ確定していない。その理由は、資料側の問題点と研究者の側の問題点とに大別される。そのうち研究者の側の問題点の1つとして、「はじめに」で述べた問題点①、つまり記述文法の不足を指摘することができる。つまりエジプト学の現状では、ある特定のテキストを取り上げ、そのテキストの文法を言語学の立場から記述するという作業が不完全なままに、翻訳や文法書が執筆されているのである。しかも多くの文法書が、ジャンルや年代が様々な資料を1つのコーパスとして扱っている。その結果、通時的な構文の変遷があたかも共時的であるかのような扱いを受けており、特定の時代の特定のジャンルのテキストの共時的文法が見え難くなっている。

文法とは具体的な言語資料から導き出されるものであって、文法書が文法に先立つことはない。したがって先ずは、1種類の資料の文法を記述することから文法研究を始める必要がある。1種類の資料のみでは結果に不満を感じる人がいるかもしれないが、資料はそれぞれ個別のものであるので、複数の資料から例文を寄せ集める前に、先ずは個別の資料ごとに文法記述を行う

必要がある。その上で、文法記述が行われた各々の資料を総合して、より大きなコーパスの中で、文法記述を目指すべきであろう[9]。本稿ではこのような問題意識に立脚し、研究の第一歩として「レニングラード・パピルス 1115」の1点の分析を行うこととする。

3.2. *iw* や *ꜥḥꜥ.n* に後続する文の種類とその構造

iw や *ꜥḥꜥ.n* には動詞を使用した文か副詞述語文[10]が後続する。以下、その構造を列挙する。

表1：本コーパスに出てくる文の種類とその構造

＜文の種類＞	＜構造＞
過去形（他動詞）	動詞（定動詞 *sḏm*）－ *.n* － 主語
過去形（自動詞）	主語 － 動詞（状態形）
完了形	動詞（定動詞 *sḏm*）－ 主語
アオリスト形	名詞主語 － 動詞（定動詞 *sḏm*）－ 代名詞主語
	動詞（定動詞 *sḏm*）－ 主語
進行形	主語 － *ḥr* － 動詞（不定詞）
未来形	主語 － *r* － 動詞（不定詞）
受動態過去形（他動詞）	主語 － 動詞（状態形）
副詞述語文	主語 － 副詞述語

---

[9] 極端な例を挙げるが、『平家物語』（鎌倉時代）、『学問のすゝめ』（福沢諭吉・明治時代）、『イスタンブールでなまず釣り。』（椎名誠・平成時代）という3作品を1つのコーパスとして設定した上でそこから1つの日本語文法を記述したとしても、体系的な日本語文法が得られるようには思われない。上記のテキストは時代とジャンルが異なっているからである。しかしながら、中エジプト語の文法書の多くが、約700年間の幅を持ち、かつ様々なジャンルから成るテキストを中エジプト語の資料として一括し、中エジプト語の文法を記述しようとしているのである。このような事態を是正しないかぎり、良質の文法記述など望むべくもない。

[10] 本稿では、副詞述語文を述語に副詞や前置詞句を用いるものに限定し、動詞的副詞文（偽動詞構文）をここに含めないこととする。なお動詞的副詞文とは、述語に「前置詞－不定」あるいは「動詞の状態形」を使用した文を指す。

3.3. 事例

「レニングラード・パピルス 1115」には 13 例の *iw* 構文と 27 例の *ḥꜥ.n* 構文、合わせて 40 例の事例が認められた。以下にそれらを列挙するが、事例の先頭にある「(1)17-18」などの数字のうち、「(1)」は例文番号を、そして「17-18」はパピルスの行番号をそれぞれ指す。

＜文頭辞 *iw* を使用した文（13 例）＞

(1)17-18【アオリスト形・主文・会話文】

iw	*r*	*n*	*s*	*nḥm*	*=f*	*sw*	
文頭辞	口	の	人	救う	それは	彼を	

人の口はその人を救うものです

(2)18-19【アオリスト形・主文・会話文】

iw	*mdw*	*=f*	*dt*	*=f*	*ṯꜣm*	*n*	*=f*	*ḥr*
文頭辞	言葉	その	使役	それは	覆われる	ために	彼の	顔が

その言葉は、その人のために顔が覆われるようにさせるものです

(3)32-33【副詞述語文・状況節・地の文】

iw	*=n*	*m*	*wꜣḏ-wr*
文頭辞	我々が	に	海

我々が海にいるとき

(4)67【過去形（他動詞）・主文・地の文】

iw	*wp.*	*n*	*=f*	*r*	*=f*	*n*	*=i*
文頭辞	開く	過去	彼は	口	彼の	対して	私

彼は私に対して彼の口を開きました

(5)67-68【副詞述語文・状況節・地の文】

iw	*=i*	*ḥr*	*ḫt*	*=i*	*m-bꜣḥ*	*=f*
文頭辞	私が	上に	腹	私の	前で	彼の

私が彼の前で腹ばいになっているとき（私が彼の前で私の腹の上にいるとき）

(6)72【副詞述語文・状況節・会話文】

rdi =*i* *rḫ* =*k* *tw* *iw* =*k* *m* *ss*

させよう 私は 経験する お前が お前を 文頭辞 お前が である 灰

私はお前に、お前が灰であるであるという状態を経験させてやろう

(7)73-74【アオリスト形・主文？・会話文？】

iw *mdw* =*k* *n* =*i*

文頭辞 語る あなたは に 私

あなたは私に語ります

［註］本稿では主語を=*k*「あなたは」とする研究（Lichtheim 1975:213, Foster 2001:11）に従ったが、主語の=*k*「あなたは」を=*f*「彼は」の書き誤りとして解釈し、この文を地の文として扱っている研究もある（Simpson 1972:53）。

(8)74-76【副詞述語文・主文？・会話文？】

iw =*i* *m-bꜣḥ* =*k* *ḫm* *wi*

文頭辞 私は 前に あなたの わからない 私を

私は自分自身がわからずに、あなたの前にいます

［註］先の(7)を地の文として判断した場合、この(8)も地の文になる可能性がある。

(9)81【過去形（他動詞）・主文・地の文】

iw *wp.* *n* =*f* *r* =*f* *n* =*i*

文頭辞 開く 過去 彼は 口 彼の 対して 私

彼は私に対して彼の口を開きました

(10)81-82【副詞述語文・状況節・地の文】

iw =*i* *ḥr* *ḫt* =*i* *m-bꜣḥ* =*f*

文頭辞 私が 上に 腹 私の 前で 彼の

私が彼の前で腹ばいになっているとき（私が彼の前で私の腹の上にいるとき）

(11)101-102【副詞述語文・状況節・会話文での語り】＝(3)に同じ

iw　*=n*　*m*　*w3ḏ-wr*

文頭辞　我々が　に　海

我々が海にいるとき

(12)116【過去形（自動詞）・主文・会話文】

iw　*=f*　*mḥ*　*ḫt*　*nfrt*　*nbt*

文頭辞　それは　満ちている　もの　良き　あらゆる

それはあらゆる良きもので満ちている

(13)119-120【未来形・主文・会話文】

iw　*dpt*　*r*　*ỉit*　*m*　*ḫmw*

文頭辞　船　未来　来る　から　故郷

故郷から船が来る

＜文頭辞 *ꜥḥꜥ.n* を使用した文（27 例）＞

(14)37-38【過去形（自動詞）・主文・地の文】

ꜥḥꜥ.n　*dpt*　*mwt*

文頭辞　船　死んだ

船が沈みました（船が死にました）

(15)39-41【受動態過去形（他動詞）・主文・地の文】

ꜥḥꜥ.n　*=ỉ*　*rd.kw*　*r*　*iw*　*ỉn*　*w3w*　*n*　*w3ḏ-wr*

文頭辞　私は　打ち上げられた　に　島　よって　波　の　海

海の波によって私は島に打ち上げられました

(16)45-46【過去形（他動詞）・主文・地の文】

ꜥḥꜥ.n　*dwn*　*.n*　*=ỉ*　*rdwỉ*　*=ỉ*

文頭辞　伸ばす　過去　私は　両足　私の

私は私の両足を伸ばしました

(17)52-53【過去形（他動詞）・主文・地の文】
ꜥḥꜥ.n ssꜣ .n [=i] wi
文頭辞 満足する 過去 [私は] 私を
[私は]自分を満足させました

(18)56-57【過去形（他動詞）・主文・地の文】
ꜥḥꜥ.n sḏm .n =i ḫrw ḳri
文頭辞 聞く 過去 私は 音 嵐
私は嵐の音を聞きました

(19)76【完了形・主文・地の文】
ꜥḥꜥ.n rdi =f wi m r =f
文頭辞 加えた 彼は 私を に 口 彼の
彼は私を彼の口にくわえました
［註］*ꜥḥꜥ.n sḏm=f* の事例については（Gardiner 1987:§480）を参照。

(20)83【過去形（他動詞）・主文・地の文】
ꜥḥꜥ.n ḏd .n =f n =i
文頭辞 言う 過去 彼は に 私
彼は私に言いました

(21)86-87【過去形（他動詞）・主文・地の文】
ꜥḥꜥ.n wšb .n =i n =f st
文頭辞 答える 過去 私は に 彼 それを
私は彼に次のように答えました（私は彼にそれを答えました）

(22)106【過去形（自動詞）・主文・会話文での語り】＝(14)に同じ
ꜥḥꜥ.n dpt mwt
文頭辞 船 死んだ
船が沈みました（船が死にました）

(23)109【受動態過去形（他動詞）・主文・会話文での語り】＝(15)に同じ

ʿḥʿ.n *=i* *rd.kw* *r* *iw* *in* *wꜣw* *n* *wꜣḏ-wr*

文頭辞 私は 打ち上げられた に 島 よって 波 の 海

海の波によって私は島に打ち上げられました

(24)129-130【過去形（自動詞）・主文・地の文】

ʿḥʿ.n *sbꜣ* *hꜣ.w*

文頭辞 星 落ちた

星が落ちた

(25)131【過去形（自動詞）・主文・地の文】

ʿḥʿ.n *=i* *mwt* *n* *=sn*

文頭辞 私は 死んだ ために 彼ら

私は彼らのために死んだ

(26)149【過去形（他動詞）・主文・地の文】

ʿḥʿ.n *sbt* *.n* *=f* *im* *=i*

文頭辞 笑う 過去 彼は を 私

彼は私を笑った

(27)154-155【過去形（自動詞）・主文・地の文】

ʿḥʿ.n *dpt* *tf* *ii.t*

文頭辞 船 あの 来た

あの船が来ました

(28)155【過去形（自動詞）・主文・地の文】

ʿḥʿ.n *=i* *šm.kw*

文頭辞 私は 出て行った

私は出て行きました

(29)157【過去形（自動詞）・主文・地の文】
ʿḥʿ.n [=i] šm.kw
文頭辞 [私は] 出て行った
[私は]出て行きました

(30)158【過去形（他動詞）・主文・地の文】
ʿḥʿ.n ḏd .n =f n =i
文頭辞 言う 過去 彼は に 私
彼は私に言いました

(31)161【過去形（他動詞）・主文・地の文】
ʿḥʿ.n rdi .n [=i] wi ḥr ḫt =i
文頭辞 置く 過去 [私は] 私を 上に .腹 私の
私は腹ばいになりました（私は私の腹に私を置きました）

(32)162【過去形（他動詞）・主文・地の文】
ʿḥʿ.n rdi .n =f n =i sbt
文頭辞 与える 過去 彼は に 私 荷物
彼は私に積荷をくれました

(33)166【過去形（他動詞）・主文・地の文】
ʿḥʿ.n ꜣtp .n =i st r dpt tn
文頭辞 積む 過去 私 それを に 船 その
私はそれをその船に積みました

(34)167【過去形（他動詞）・主文・地の文】
ʿḥʿ.n ḏd .n =f n =i
文頭辞 言う 過去 彼は に 私
彼は私に言いました

(35)169【過去形（自動詞）・主文・地の文】
ʿḥʿ.n =i hꜣ.kw r mryt
文頭辞 私は 降りた に 浜
私は浜に降りました

(36)170【進行形・主文・地の文】
ʿḥʿ.n =i ḥr iꜣš n mšʿ
文頭辞 私は 進行形 声を掛ける に 水夫
私は水夫に繰り返し声を掛けました

(37)174【過去形（自動詞）・主文・地の文】
ʿḥʿ.n [=i] ʿḳ.kw ḥr ity
文頭辞 [私は] 行った もとに 支配者
[私は]支配者（王）のもとに行きました

(38)176【過去形（他動詞）・主文・地の文】
ʿḥʿ.n dwꜣ-nṯr .n =f n =i
文頭辞 感謝する 過去 彼は に 私
彼は私に感謝しました

(39)177【受動態過去形（他動詞）・主文・地の文】
[ʿḥ]ʿ.n [=i] rd.kw r šms
文頭辞 [私は] 任命された に 従者
[私は]従者に任命されました

(40)183【過去形（他動詞）・主文・地の文】
ʿ[ḥʿ.n] ḏd .n =f n =i
文頭辞 言う 過去 彼は に 私
彼は私に言いました

4. 考察

4.1. *iw* 構文と *ḥr.n* 構文の種類と事例数

表2は *iw* 構文と *ḥr.n* 構文の種類と数を示したものである[11]。表2においてスラッシュ（/）で区切った部分は、「主文/状況節」の別を示す。また文の種類の語順と構造は表1に示した通りである。

表2：*iw* 構文と *ḥr.n* 構文の種類と事例数

文の種類	*iw* 構文	*ḥr* 構文	合計
過去形（他動詞）	2	13	15
過去形（自動詞）	1	9	10
完了形		1	1
アオリスト形	3(2)		3(2)
進行形		1	1
未来形	1		1
受動態過去形（他動詞）		3	3
副詞述語文	1(0)/5		6(5)
合計	8(6)/5	27	40(38)

[註]（　）で括った数値は例文(7)と例文(8)を除外した場合のもの。

第一に指摘しておきたいことは、*iw* と *ḥr.n* とで後続する文の種類に違いが見られることである。特に、*ḥr.n* の後で未来形が現れていないことは重要である。なぜなら *ḥr.n* がナレーションであれば、当然ながらそこに未来形が共起し難いからである。それに対して、*iw* が語り手という基点を表した表現であれば、未来形のような基点を必要とする時制で *iw* が使用されていることに納得が行く。第二に指摘したいことは、*iw* 構文のみが状況節としても機能するということである。表2からわかるように *ḥr.n* はすべて主文であり、状

[11] 例文(7)と(8)については、本稿で採用した構文解釈と異なる解釈を提示している研究もある。そこで表2と表3では例文(7)及び(8)を抜いた場合の事例数も同時に示すことにした。

況節にはならない。

以上の点を踏まえれば、*iw* と *ḥꜣ.n* の働きを同一のものとして規定することはできないであろう。

4.2. 地の文と会話文から見た *iw* 構文と *ḥꜣ.n* 構文

表3は「地の文」・「会話文での語り」・「会話文」で *iw* 構文と *ḥꜣ.n* 構文がどのように分布しているかを示したものである。なお表3においてスラッシュ（/）で区切った部分は、「主文/状況節」の別を示す。

表3：地の文・会話文・会話文での語りにおける *iw* 構文と *ḥꜣ.n* 構文の比較

文頭辞	文の種類	地の文	会話文での語り	会話文	事例数合計
iw	過去形（他動詞）	2			N=13(11)
	過去形（自動詞）			1	
	アオリスト形			3(2)	
	未来形			1	
	副詞述語文	0/3	0/1	1(0)/1	
iw 構文小計		2/3	0/1	6(4)/1	
ḥꜣ.n	過去形（他動詞）	13			N=27
	過去形（自動詞）	8	1		
	完了形	1			
	進行形	1			
	受動態過去形	2	1		
ḥꜣ.n 構文小計		25	2	0	

［註］（　）で括った数値は例文(7)と例文(8)を除外した場合のもの。

考察の前に「会話文での語り」について説明しておきたい。中エジプト語の文学作品では、地の文で語られた内容を登場人物が会話で繰り返すというものがあるが、このような語りを本稿では「会話文での語り」と呼ぶことに

する。次に「会話文での語り」の事例を確認しておく。

図1において、入子1は部下が上司に語った物語である。この入子1の中に「部下から上司への語り（ナレーション）」と「部下と大蛇の会話」とが存在する。事例の(3)我々が海にいるとき、(14)船が死にました、(15)海の波によって私は島に打ち上げられました、は入子1における「部下から上司への語り」であり、これらは入子1の地の文に属している。ところがこれら3つの文は、部下が大蛇へ語る会話文で、そっくりそのまま語り直されているのである[12]。会話で語り直されたそれらの文は、純粋な会話表現というよりも、会話文における地の文として機能している。それらを本稿では「会話文での語り」と呼んでいるのである。

次に具体的な分析に入る。最初に、会話文での語りを除外した上で表3を見ると、*iw* 構文が地の文と会話文の両方に現れているのに対して、*ḥꜣ.n* 構文が地の文にのみ現れていることがわかる。このことは、ポロツキーやディペイトが *ḥꜣ.n* を Narrative として扱ってきたことを裏付けるものである。もちろんガーディナーも *ḥꜣ.n* を Narrative として扱ってきたわけだが、既に述べたように、ガーディナーは *iw* に対しても Narrative という用語を適用したのであるから、ガーディナーの Narrative は、ポロツキーやディペイトの概念と異なることになる。またドレも *iw* と *ḥꜣ.n* の両方を Narrative として扱っていたが、この見解もポロツキーやディペイトとは異なる。

表3の地の文の欄だけを見れば、確かに *iw* も *ḥꜣ.n* も出現しており、両者の働きが同じように思われるかもしれない。しかしながら会話文を考慮するならば、*iw* と *ḥꜣ.n* の働きに差があるとみなさなくてはならない。なぜなら *ḥ.n* が会話文で使用されていないからである。この点を踏まえ、仮に Narrative の意味を地の文に限定した場合、Narrative 専用で用いられる構文は *ḥꜣ.n* であると言える。このことから *iw* に対して Narrative を適応していたガーディナーやドレの見解は改められる必要があるだろう。また、かつてドレは *iw sḏm.n=f* と *ḥꜣ.n sḏm.n=f* の差が「stylistic」なものであると述べていたが（Doret 1986:126）、「stylistic」なる用語は定義が曖昧であり、学術的に適切な説明であるとは思われない。

---

[12] つまり、(3)が(11)として、(14)が(22)として、(15)が(23)として語り直されている。

次に使用頻度を考察すると、かつてドレは *iw sḏm.n=f* の頻度が *ḥꜥ.n sḏm.n=f* よりも高いという見解を提示していた（Doret 1986:126）。しかしながら「レニングラード・パピルス 1115」では、*ḥꜥ.n sḏm.n=f* の事例数が 13 例であるのに対して、*iw sḏm.n=f* は 2 例しかない。従って「レニングラード・パピルス 1115」という資料においてはドレの見解が該当しない。

とは言うものの使用頻度に関するドレの見解に関してはコーパスの違いを考慮する必要があるだろう。なぜなら、ドレの研究が使用している中エジプト語が第一中間期の資料（Doret 1986:）であったのに対して、本稿で扱った「レニングラード・パピルス 1115」が第 11～13 王朝時代に模写されたものであるからである。「*iw* が既に古王国時代から見られるのに対して、*ḥꜥ.n* は第一中間期時代までは文頭辞として使用されない」（Doret 1986:126）との見解をドレは提示していたが、このドレの見解に本稿での結果を加味すれば、第一中間期までの地の文には *iw* が多く、やがて *ḥꜥ.n* が使用されるようになったという通時的変化を想定することができるかもしれない。但し、この想定の検証については今後の課題としたい。

4.3. 文頭辞 *iw* と *ḥꜥ.n* の働き

以上の考察を踏まえ、文頭辞 *iw* と *ḥꜥ.n* の働きを規定することにしたい。第一に筆者は、*iw sḏm.n=f* は「自己を中心とした過去形（egocentric past）」（Polotsky 1965:§49）であり、*ḥꜥ.n sḏm.n=f* は「客観的なナレーション（objective narration）」（Polotsky 1965:§49）であるというポロツキーの見解に賛同したい。その根拠は、*iw* が地の文と会話文の両方で使用されているのに対して、*ḥꜥ.n* 構文が主に地の文で用いられていることにある。*iw* 構文が自己を中心とした表現であるならば、それが会話文で出現することは自然なことであるし、逆に *ḥꜥ.n* 構文がナレーションであるならば、それが地の文で出現するは至当である。

しかしながらこの規定だけでは、*iw* が地の文で使用されていることや、会話文における語りで *ḥꜥ.n* が使用されることの説明が付かない。そこで筆者は第二に、同じ過去形でも語り手の状況から内容を説明するモードと、語りの状況を超越して出来事を物語るモードとに分かれるというディペイトの見解に賛同したい。この見解に従えば、*ḥꜥ.n* 構文を物語モードの構文として規定

することができる。自己を消すように努めた上で、出来事そのものを語ろうとするモードが物語モードであり、物語モードが主に地の文で出現することは当然の帰結である[13]。従来、定義が曖昧なままに narrative、narration、narrative sentence なる用語が使用されてきたが、筆者は narrative を「物語モードの」、narration を「物語モードでの語り」、narrative sentence を「物語モードの文」[14]として規定したい。

では、物語モードは地の文のみに現れるのであろうか。表3において、会話文での語りで *ḥꜣ.n* が使用されていたように、物語モードは会話文でも出現しうる。このような表現は古代エジプト語の世界だけではなく、例えば現代日本語において、事件の目撃者が事件内容を警察に物語る際の語りとしても現れるものである。

他方、*iw* は語り手を中心として事態を記述・説明する「提示モード」[15]である。中エジプト語の未来形には *iw* が義務的に使用されるが、それは、未来が語り手という基点から見た時制であるからだと思われる。そして、*iw* が語り手を中心とする表現であるならば、それが会話で多用されることは至当である。

では、何故 *iw* が地の文に出現するのであろうか。「レニングラード・パピルス 1115」の地の文における2例の *iw sḏm.n=f*（本稿での例文(4)と(9)）に

---

[13] 物語モードを示す言語形式には過去形が多用される。この形式は、物語モードを示す一つの方法であり、従って単に過去の行為を述べたものではない。1970年に発表された筒井康隆の小説「2001年公害の旅」には「2001年頃には、「生きてますか」 そう言って顔を覗きこむのが流行しはじめた。」（筒井 1986:55）という表現があるが、最後の文の動詞を「しはじめる」に改めると、物語モードとして機能しないように思われる。この「しはじめた」は過去形の形式を持つが、過去の行為ではなく物語モードを示している。

[14] narrative sentence に関しては「物語文」という邦訳が既にある。しかしながら定義を与えずに「物語文」なる邦訳を使用していると、「narrative sentence は物語というジャンルで使用される文である」というような印象を読者に与えてしまうことが懸念される。物語モードとしての narrative sentence が「小説・おとぎ話」で頻繁に使用されることは確かだが、王室歴史碑文でもしばしば使用される。このように narrative sentence はテキストのジャンルを示した用語ではないので注意が必要である。

[15] プリンスは語りのモードと対峙する概念として「示すこと（showing）」（プリンス 1991:109, 176）というモードを設定している。本稿ではプリンスの概念を援用しつつも、「提示モード」という用語を使用する。

ついて、かつてディペイトが説明を与えていた。ディペイトによれば、地の文に出現する *iw* 構文は「私に起こった」ということを述べるために、ナレーションの連鎖を断ち切って出現したものである（Depuydt 1998:28）。この説明は、ナレーターという役割を越えて、地の文の中に話者の視点が入り込んでいるという状況を示している。我が国の文学研究において、語り手の感情が入り込んだ地の文の表現を「草子地」と呼ぶが（例えば中山 1995:66 を参照）、これを援用すれば、地の文に出現する *iw* 構文を草子地として規定することができるかもしれない。だが、これについては今後の課題としたい。

以上、文頭辞 *iw* と *ḥꜥ.n* の働きを規定してみたが、最後に実際の例文を確認して本稿を閉じることにしたい。「レニングラード・パピルス 1115」という文学作品には、任務に失敗して落胆している上司に対して、部下が自らの失敗譚を話し、上司を励まそうとするという内容が書かれている。その部下の失敗譚が入子１を構成しているのであるが、この入子１は「私は支配者の鉱山に赴きました（*šm.kw r bꜣ ity*）」という表現で始まる。この表現は上司に対する会話には違いないが、しかしこれは部下が上司に語り出した新たナレーション（入子１）の始まりである。このような両義的な役割を持った文だからであろうか、入子１の出だしの文には *iw* も *ḥꜥ.n* も付いていない。この文に続いて、部下が船で出発したことと、突然に嵐がやって来たこととが語られるが、これらの語りにも *iw* や *ḥꜥ.n* が付いていない。ところが、その次に書かれている(41)において、初めて *ḥꜥ.n* が使用される。

(41)=(14)37-38【過去形（自動詞）・主文・地の文】

ḥꜥ.n　*dpt*　*mwt*

文頭辞　船　死んだ

船が沈みました（船が死にました）

(41)の前まで、会話文とも地の文とも解釈可能な文を語ってきた語り手は、この文から明確な物語モードに入っていく。そして物語は、(41)の後に更に４つの物語モード文（本稿で言う(15)-(18)）を展開する。その語りでは、海に投げ出された部下が島に漂着し、そこであらゆる種類の食物を見出して神に感謝を捧げていたとき、体長 15m 程の大蛇がこちらに向かってくるのが

わかった、という内容が述べられる。その後、ナレーションの語り手である部下は(42)を発することになる。

(42)=(4)67【過去形（他動詞）・主文・地の文】

iw *wp.* *n* *=f* *r* *=f* *n* *=i*

文頭辞 開く 過去 彼は 口 彼の 対して 私

彼は私に対して彼の口を開きました

それまで物語モードで語られた語りの連鎖が、(42)において突如として切れ、語り手を意識した過去形へとシフトしていると本稿では考えたい。なぜなら、(42)は大蛇の行為を語っているというよりも、大蛇が私に対して口を開いたという行為への語り手の驚きを表現しているように思われるからである。そして(42)に続いて発話された会話文が終了すると、地の文は再び *ꜥḥꜥ.n* の付いた(43)で語られることになる。

(43)=(19)76【完了形・主文・地の文】

ꜥḥꜥ.n *rdi* *=f* *wi* *m* *r* *=f*

文頭辞 加えた 彼は 私を に 口 彼の

彼は私を彼の口にくわえました

(43)に続いて、再度、大蛇が口を開いたということが述べられるが(44)、これも語り手の驚きを述べた文なのであろう。そしてこの(44)以降、地の文の文頭辞に *iw* が使用されずに物語は終わりを迎える。つまり(44)の後では地の文の文頭辞に *ꜥḥꜥ.n* が使用されているのである。

(44)=(9)81【過去形（他動詞）・主文・地の文】

iw *wp.* *n* *=f* *r* *=f* *n* *=i*

文頭辞 開く 過去 彼は 口 彼の 対して 私

彼は私に対して彼の口を開きました

以上が本稿で規定したモードの説明である。

5. 結論

本稿での考察結果は次の４点にまとめられる。

①「レニングラード・パピルス 1115」には、自己を中心とした視点を持つ提示モードの文と、出来事を客観的に語る物語モードの文が存在する。

②*iw* 構文は語り手を中心とした提示モードの文である。

③*ḥꜥ.n* 構文は物語モードの構文である。

④物語モードは主に地の文で出現するが、地の文だけに限定される表現ではなく、会話文でも使用される。

これらの結論の中で、①から③は主にポロツキーやディペイトの見解に依拠したものであるが、彼らの研究では自説の提示が主な目的であり、特定の作品を使用した上で事例を網羅的に提示したものではなかった。この点を踏まえ本研究では「レニングラード・パピルス 1115」の全資料を扱い、用例を列挙することによって、彼らの説を補強したのであり、ここに本研究の１つの意義がある。更に本稿では、ポロツキーやディペイトが用いていなかった地の文と会話文の別を採用することにより、④の結論を得た。

以上が本研究で得た結論であるわけだが、しかしながらこの結論をもって *iw* と *ḥꜥ.n* の働きがすべて解明されたということにはならないであろう。今後は本稿での結論を土台として、更に研究を積み重ねていく所存である。

【参照文献】

Allen, J.P. 2000 *Middle Egyptian*, Cambridge.

Depuydt, L. 1998 "The Meaning of Old and Middle Egyptian *jw* in Light of the Distinction between Narration and Discussion", *in: Jerusalem Studies in Egyptology*, ed. Grumach, S. Wiesbaden, 19-36.

Doret, É. 1986 *The Narrative Verbal System of Old and Middle Egyptian*, Genève.

Erman, A. 1906 "Die Geschichte des Schiffbrüchigen", *ZAS* 43, 1-26.

Foster, J. 2001 *Ancient Egyptian Literature, An Anthology*, Austin.

Gardiner, A.H. 1927 *Egyptian Grammar*, Oxford.

Gunn, B. 1924 *Studies in Egyptian Syntax*, Paris.

Lichtheim, M. 1975 *Ancient Egyptian Literature*, Vol. I, Berkeley.

Loprieno, A. 1995 *Ancient Egyptian. A Linguistic Introduction*, Cambridge.

Polotsky, H.J. 1965 "Egyptian Tenses", *The Israel Academy of Sciences and Humanities* II/5, 1-26.

Simpson, W.K. (ed.) 1973 *The Literature of Ancient Egypt, An Anthology of Stories, Instructions, and Poetry*, New Haven and London.

筒井康隆 1986 『くたばれPTA』新潮文庫.

永井正勝 1999「秋山慎一著『やさしいヒエログリフ講座』」『オリエント』(42/1) 179-182.

永井正勝 2000 「後期ポロツキー説における中エジプト語の文／節体系」『オリエント』(43/1) 19-39.

永井正勝 2001 「*m=k* の後に出現する *sḏm=f*/*sḏm.n=f* 形について」『エジプト学研究』(第9号) 66-88.

永井正勝 2002 『入門 ヒエログリフ』 アケト

永井正勝 2003 「中エジプト語の *m=k* 構文の統語論」『オリエント』(46/1) 40-56.

中山眞彦 1995 『物語構造論』 岩波書店

プリンス, J. 1991 『物語論辞典』 松柏社

屋形禎亮 1978 「難破した水夫の物語」杉勇他訳『古代オリエント集』筑摩書房 425-429.

On the Function of the Middle Egyptian Introductory Particle *iw* and *ꜥḥꜥ.n* in Papyrus Leningrad 1115

NAGAI Masakatsu

In this paper, I discuss how the introductory particle *iw* and *ꜥḥꜥ.n* are used in Papyrus Leningrad 1115 and stress the following points:

The introductory particle *iw* is used in both direct speech and narration, but its function is not narrative. As H. J. Polotsky has wisely noted, *iw* "has the effect of relating the statement to the sphere of interest and the time of speaker."

The introductory particle *ꜥḥꜥ.n* is strictly used in a narrative sentence, which might be defined as a sentence in the telling mode that a speaker uses to relate some events.